

(あらすじ)

七聖騎士が封印したといわれる、永き災厄が復活したと言われて百年余り。その間、罪人のうち一部の者は償い人として、永き災厄の討伐を命じられてきた。教え子を守るうとして反逆罪で裁かれた七聖騎士の長子、テリオルは、償い人として仲間と共に、永き災厄を倒す旅に出るのだった。

・テリオルⅡアーノルド(三十一)

学者の男性。七聖騎士の長子だったが、神託により廃嫡された過去がある。魔防も物防もバランス良く成長する。

・レフイーネ(二十二)

剣士の女性。酒場の一人娘だったが、ある事件に巻き込まれ償い人になった。魔防が高めだが、物攻のステータスは若干低い。テリオルの近くで戦うと必殺率が上昇するため、それで補おう。

・ダイケンズ(二十一)

傭兵の男性。口数は少ないが、仲間思い。パーティーで一番、素早さの能力値が高い。しかし、魔防は低いの

で、敵の魔法攻撃に注意しながら戦おう。

・アリアナⅡカサグランデ(二十六)

貴族階級出身の未亡人。第一級殺人罪(同じ身分間の殺人)で償い人になった。多くの魔物を殲滅する手料理は強力だが、物防がとても低い。

・リチャード(三十九)

商人の男性。弓矢を手にすると、狂人のようになる。そのせいで仲間からは、殺人罪で償い人になったと勘違いされている。彼の場合、力尽きることはないので安心して戦おう。

アーミュットは南西部に位置する小さな街だ。伝説によれば、初代聖騎士たちが災厄を封印したときも、この街に魔物が出たとされている。

街に入ると、テリオルたちは宿屋に行った。五人分の部屋の空きはあった。予約をして早々に、外へ出ようとするテリオルたちに、宿屋の店主は声をかけた。

「街の外れに墓地があるんだが、そこには近づかない方がいいぞ」

「何故だい？」

「幽霊が出るって噂なんだよ。真偽は分からないけど、

興味本位で行かない方が良い」

テリオルたちは目配せをした。魔物が潜んでいるかもしれない。行ってみる価値がありそうだ。

「分かった。気を付けるよ」

「それと」

受付の近くにいた従業員の女性が口を挟んだ。

「墓地の近くにはシュテー族が住んでいるから気を付けてくださいね」

シュテー族は、赤毛と色白の肌が特徴の、古来より差別を受けてきた民族だ。ラヴァスタ人とシュテー族の婚姻は許されていない。

「シュテー族と話したことあるか？」

ディケンズの問いに、皆首を振る。

「見かけたことならあるけど……」

レフィーネは腕を組んだ。

「接したことはないね。どんな人たちなんだろう？」

無知というものは恐怖を生み出す。通常ラヴァスタ人は、滅多なことではシュテー族と関わることはない。テリオルたちは、シュテー族は赤毛と白い肌を持つ民族、という情報しか知らないのだ。

「野蛮な人たちだって聞いたことがあるわ」

アリアナに続いてリチャードも思い出したように言う。

「そういえば、吸血民族だって噂も聞いたことがあるな」

レフィーネは首をかしげた。

「そんな風には見えなかったけどな……」

「噂などあてにならないことも多いからね。そもそも、皆何故、シュテー族が差別を受けるようになったのか知っているかい？」

テリオルの問いに答える者はいない。

「恥ずかしい話だが、学者の私でも、何故シュテー族が差別を受けるようになったのか詳しい理由を知らないんだよ。昔、教皇暗殺を企てたからと言われていたが、それだって信頼できる文献が残っていないから、憶測にすぎない。人々が噂しているのも、その差別を受け始めた理由と同じくらい確かなものではないだろう」

ディケンズは頷いた。

「そうだな。シュテー族がラヴァスタ人を襲った、という事件は聞いたことが無いし、遭遇したとしても大丈夫じゃないか？」

小さな街のため、外れにある墓地もすぐに見つかった。

先ほどまで人々の生活音が聞こえていたのに、今は風の音しか聞こえない。

リチャードは辺りを見渡した。墓が二十個近く並んでいる。

「来てみたのはいいが、魔物もここに現れるだろうか」

「どうかしら」

「墓しか見えませんね」

墓地の隅々まで調べようと足を進めた時、若い男の声

がした。

「こちらに何か用ですか？」

振り返ると、黒い服に身を包んだ赤毛の青年が立っていた。——シュテール族だ。

テリオルは奇異の目を向けないよう気を付けながら、答えた。

「ここに幽霊が出る噂を聞いてね。少し来てみたのさ」

「幽霊……ここで仕事をして結構経ちますが、そんなものは見たことはありませんよ」

墓地で仕事、おそらく青年は墓守か類似する職業に就いているのだろう。

「……大方、子供がここに——僕に近づかないようにするために、大人が言いふらした噂でしょう」

この青年は、街の住人達に避けられてきたのだろう。子供が自分に近づかぬよう言いつけられていることを感じつつも、それを悲しむ素振りはありません、全てを諦

めているような表情だ。

「じゃあ、ここで魔物を見たことはないか？」

「魔物？」

ディケンズの問いに青年は眉をひそめた。

「魔物も見たことはありませんよ。さあ、お取引きください。ここは関係のない人が来る所ではありませんよ」

青年の言葉には、有無を言わせぬ響きがあった。

テリオルたちは顔を見合わせると、墓地の門の方へ歩

き出した。

青年の顔を間近で見たテリオルは、思わず眉を上げた。目立つ顔ではないが、存外整っている。シュテール族でなければ、女性に好意を寄せられることも多かつただろう。

墓地を後にしてから、テリオルは感心したように言った。

「墓地にいたシュテール族なかなかの美男子だったな」

「美男子？　　そうでしたか？」

レフィーネにとっては、テリオル以外の男の顔などどれも大差なく見えている。

「確かに、悪くない顔立ちでしたわね。よく見ると整っている、と言った感じかしら？」

「私たちに、墓地に近寄ってほしくなさそうだったな」

「俺たちがラヴァスタ人だからじゃないか？　　きつと今まで差別も沢山受けてきたんだろうし」

リチャードはそう言いながら、シュテール族が吸血民族だという噂を口にしていたことを思い出していた。

「あのシュテール族の男が邪魔だな。夜にならなければ、墓地を探索することができなそうだ」

「でも、夜には門が閉まっちゃうよね？　　乗り越えて入る？」

ディケンズは墓地の門と、それを囲う塀を思い出していた。門の上段はネズミ返しが設けられていたが、塀は

何の施しもされていない。

「俺に任せろ」

そう言うと、寡黙な傭兵は自信ありげに笑みを浮かべた。

陽が沈み、夜が更けた頃テリオルたちは墓場を訪れた。門は固く閉ざされている。しかし、それは想定内のことだ。

傭兵のデイケンズにとって、自分の背より高い塀をよじ登るのは、簡単なことだった。デイケンズは塀の上に乗ると、音を立てずに墓地へ飛び降りた。塀の向こうにいる仲間たちを補助しようと立ち上がったところで、カンテラの灯りに気づいた。——自分のほかに、誰かいるのだ。

デイケンズは心の中で仲間たちに一言断ると、足音を殺して灯りに近づいて行った。カンテラの持ち主の顔が確認できる所まで近づくと、デイケンズは足を止めた。

赤毛に、透き通るような白い肌。昼間、墓場で出会ったシュテー族の青年だ。青年に気づかれぬよう、息を殺していたが、青年が何をしているか悟った瞬間、デイケンズは目を丸くした。

デイケンズは一気に青年に近づくと、怯むことなく、ナイフを青年に突き付けた。

シュテー族の青年は、墓を掘り起こしているのを見られたことと、突如突き付けられたナイフに怯えたように、

肩を震わせた。

「誰だ!？」

デイケンズの顔を認めると、青年は目を見開きながら、震える声で尋ねた。

「何でここに来たんだ?」

「そういうお前は、何をしていたんだ?」

デイケンズたちが問答している間に、背後から何かが落ちる音がした。仲間が頑張つて塀をよじ登ってきたのだろう。音の数から推測すると、全員登つてこれたようだ。

「よく登つてこれたな」

足音が近づいてくると、デイケンズは視線を青年からずらすことなく、声をかけた。

「君がなかなか姿を見せないから、不安になってね。力を合わせれば何とかなつたよ」

塀の向こう側に置いてきたデイケンズの槍を渡しながら、テリオルは尋ねた。

「ところで、これは一体どういう状況なんだ?」

「こいつ、墓を掘り起こしていたんだ」

テリオルたちが息を呑むのが分かった。

青年は口を閉ざしたまま、敵意を隠そうとしない。

テリオルは努めて平静に言った。

「私たちは償い人だ」

一瞬青年の顔に戸惑いの色が見えた。

「永き災厄を討伐するために、各地を旅している。この街にも魔物がいるはずなんだ」

テリオルに目配せられて、デイケンズはナイフをしまつた。

「お前は一体何者なんだ？ 墓を掘り起こして何をしている？」

「僕は……」

青年は語りだした。

「僕はゼノアード。ネクロマンサーだ」

レフィーネは怪訝そうな視線を向けた。

「ネクロマンサー……？」

「僕がシュテー族なのは知っているよな？」

テリオルたちが頷くのを確認して、ゼノアードは話を続けた。

「シュテー族はまともな職に就けない。人が嫌がるような仕事しかできない。僕の場合は、墓守だった。墓守用の家に、死霊を操る方法が書かれた書物が残っていて、それで墓地の死体を使うようになったんだ」

ネクロマンサーとしての力を強めるために、死体を掘り起こしていたのだろう。

「でも、人のお墓を暴くなんて……」

ゼノアードは厳しい顔をしながら、アリアナに詰め寄った。

「街の人たちが僕にしてきたことを知っても、同じことを言えるか？ まるで存在しないもののように扱われるか、疫病のように腫物扱いをされるか、はたまた暴言や暴力を振るってくるか……。あいつらがしてきたことを考えれば、これぐらい許されるだろう」

誰もそれ以上言えなかった。差別を受けたことのない者が、ゼノアードに何か言う資格は無いように感じた。

「……君が辛い思いをしてきたのは分かっただし、私たちが何も言えることはないだろう」

最初に沈黙を破ったのは、テリオルだった。

「君がしていたことを他人に話すつもりはないよ、だから……少しこの墓地を調べさせてくれないか？」

ゼノアードは黙ったまま、疑っているような怯えているような表情でテリオルを見つめている。テリオルの言葉が、ラヴァスタ人の言葉が信用できないのだろう。

「もし、私が約束を破ったなら、君は街の人々に、私たちが償い人だと知らせても良い。償い人も世間からは忌み嫌われる存在だからな、君がされたことと同じことをされるかもしれないな」

「……」

ゼノアードはなおも黙っていたが、しばらくするとカシテラを手を取った。

「僕も手伝う。調べ終わったら、さっさと帰ってくれよ」

「……ありがとう」

テリオルも礼を言うと、カンテラをかざしながら墓地の探索を始めた。

一つ一つの墓を照らしながら調べていく。一際大きい墓の周りを調べているうちに、リチャードは頓狂な声を上げた。

「ん？」

リチャードはしゃがみこんで、地面を凝視した。

「ここ……不自然に草の量が少くないか？」

「どれですか？」

レフィーネもしゃがみこんで、カンテラを地面に近づけた。

確かに、この墓石の近くだけ、不自然に生えている草の量が少ない。まるで、墓石を奥にずらしたことがあるかのようだ。

「嘆きの魂を癒した者に、道は開かれる」

墓石に彫られた言葉を読み終えると、レフィーネはアリアナを呼んだ。

「アリアナさん！」

「どうしたの？」

「これ、読んでみてください。回復魔法を詠唱すれば、何か起こるんじゃないですか？」

アリアナも墓石の言葉を確認すると、人を癒す魔法を放った。

「ヒール！」

その途端、墓石が音をたてながら動いた。墓が動きを止めた時には、人が一人入れるほどの、底が見えない穴が広がっていた。